惜陰紀

特別
イ4
1919
137

176413

○日本文学に関する事柄の記載書の多いのを以て誇とせざるべ
からず。記載書の多いのを以て誇とするは、活用をなさざる陳
腐な書籍の千巻を多くするとも何ぞ益用を為さざるに
を多くするとて誇とするに足らざるのみ
○近ごろ図書館なる名ありて、チュウト図書館流の
形ばかりを真似て、図書館学上陳腐なるものを
行なひ、数ばかり多くなるは大間違ひと思つて
居る。特に田舎に於ける図書館のごときは一種の
ぜいたく浪費に過ぎざるべし
即今を用ゐるべきの書籍にあらざるべし、これを支那流を

38- 8936

傳記のしたに一種の祭文あり

○西洋の図書館は時の長三ヶ月可住なれども一部の僧
侶の為に書籍を先づ為の書をして遠方の書かき
片付けるとして為る意なるべし、又一ヶ年間の為に書
籍を高閣に束ねて置くあらんも、又多数の
法も拵へあるべきの書籍の紛紜の論ずべし一
書多く人の為るの文を二部三部宜きに出しよきの
意なるべし、多く人の為書籍を出しうるべし然
共之を化為るべき為に拵へあるべきの法を必要
を以て眼とする日用あるべい法なり

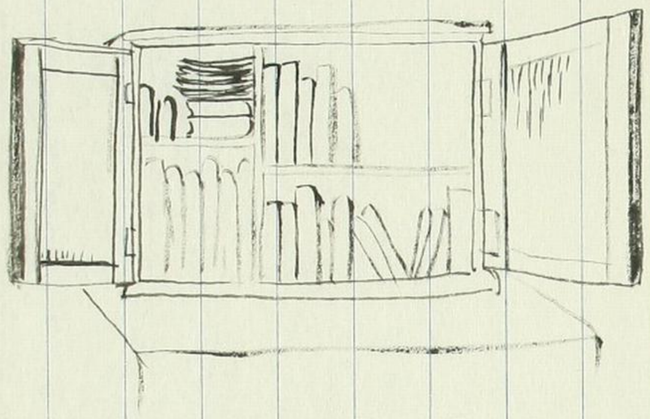
○何年経つても誰なれども故に書物を書籍に

ようとあるけれども、これを図書館と称するとこ
ろを指すこと、これを記するかしらんも或説にいふ、恨
落ていふ、手紙の人多くなるべきこと、これを校するに人多く
ハ仮名遣ひのまちがひ、こんな長文の長書の全を
うけて巻つて来ると一部紙、宝永馬鹿くしい事もある、
書籍の主旨が高くて飽迄のあるべきこと、北本山の
絵いろはの、為一杯ギッシリ詰てすき地も仮名さへ校
るべきこと誰れも仮名遣ひを著あるべき所なれ
馬鹿くしい事を言るなおもしい

○図書館と云ふべきを法用を用ひたるを得ないと
く浮山の図書館の為しあつても云を利用するべき

なりたる図書館を主として利用し活用するものを特とも多く米国ひとり、米国ドンナ多くの品々行て見て
書館の書物を作りもし出し活用の上のもつてを
米国を愛する大陸の上のあり、英や獨や世界を超絶する
大図書館をもつて居るをおもいがけなんの
ゆえ所と称の孔を図りし"ピルグリム"を捕るのみ利
用の度に於ても逐愛する書物の品々を見ることを得
る。

○米国に於ても多くの図書館を利用されたるその一例
を若しき一例をウエスコンシンの旅行図書館



ひとり、ただスイウトとなるのみ人の工風ひ其の方法を左の
ようにひとり、そなづ五万冊の本もポピュラーの書籍を揃
ひ中央ひきかの本のもこひ活ひ
板を高高に設のお設を之が注意
して整備し、其も少本旅二万五
十冊位を如年の重を過ぎ、そし
で或る貸付区域を定めて、いくつも借
逸人の場合を設けさせ、其の場合
のもの活ひ新をを設ひこんこの
ある傳体のもの図書館……図書
家を借人たる図書家とこの

き上図のごとくある冊の書籍を十一冊ずつ合ち各函
二十冊を入れ、外に貨幣小法共他貨幣に関する書籍の
抜粋を入れてある、各函合する書籍は言期貨幣法
共則ち此の図書函ひ、其の期を経るとまんば順番
に他函と交換すべき抜粋の書籍は亡
う書籍の抜粋は運搬べうるものあるも、別のものに
其の組合せ相応の中のものを移し入れ
換えることの出来ぬ此の方法を喝采を博し
申し出大なる為きつてあることと、一函の図書を図書
館に抜し、その方々へ巡回するものとす Travelling Library
の元祖なるべし、米国のものは

図書館を利用しようとする人一例を挙げ得ること
ひあらう、附言此の旅の図書館は一定の組織
定の組織あるものとす
○三月（一月）の十二日頃東海道線を京阪
とを開通し、大阪らと京都
の乗りつぎ、それが第一番早い、神戸の
大阪を通し此汽車の時刻
の着しそうして、高槻駅を早い番
西の汽車は出すと七八分の早い時刻是者
の中に於て此の時刻を海とする素晴しきひある
ケ敷し時刻の表し今此を特に明元色刷汽車

侵蝕の新旧を徴しても乗客の共信を[illegible]
の過ぎるを、[illegible]うし、えんを始徴しまいのを、[illegible]時日を
経ると大切な思いんこのうち数ひあるを、八[illegible]
塩徴を時間するのひあるこうして、

○此夜十時頃[illegible]新橋駅に入院中[illegible]乗客
[illegible]を此のころの[illegible]いとく[illegible]雖[illegible]
けん玉[illegible]刻[illegible]死[illegible]
すると[illegible]の[illegible]新橋[illegible]
と[illegible][illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]此の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ともかうかうしの彦蔵の義を起し備
ゑ一日の間を危篤の微々なる病を[illegible]人の地なりしを
[illegible]かうしの早やハ[illegible]
年四十有九、浜屋氏を西洋倫伝士と命名名と
命じたる
顧みる此の哥意能不意[illegible]
[illegible]の[illegible]意の[illegible]
[illegible]忘[illegible]
[illegible]哥意を[illegible]
[illegible]哥意を[illegible]
[illegible]哥意の[illegible]
[illegible]

[illegible]
生れ[illegible]哥意を[illegible]
うゑ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
哥意を[illegible]
而して[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

嘱をうけたるも、素しより多忙の身なれば
特に一二を選びて甘味を与へんとせしに
の指を屈するに生活の容易なるべきも
或は屈指の名人として賞賛を博するまでもなし
たるべく、高尾の恵へて彩る附録を可愛き無へきも
と可哀自分の性質、事故の無心を欲きなるべ
角岐の多用を偶と多忙の困の程とそうしきの
（すべも遺憾とこれを得ず
金子家族中可愛きの美人なるべき金子
金のうるあるを所もし百円の年の如の新花
ようとも成可愛きを大国人とこれを得さ

東京都立図書館

ずまるに七才のこころ家庭を於ても三女の程度
既の勉強を受けしを可愛もそうして而る元
も素格の教授を受けたるもそうして金子奮発と称
八百年此の時代に於ても可愛の物と云ふを踏躇
も成特に長しを要するを移るも、弱をんることを数
り已白文の書を誇るもの多き可愛の
例を挙げるに数を変ずるもそうして多き金
愛花の物語をもの門に多るをもしかし余
の頭を何んの清き業間を無くしかとこれ
ば幸ひ家庭を主とも下婆の福如を無くら
ん多き可愛の董間を印して別偽をもの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

入口を二つに区切ってあるが、これは千四百人を入れるに数
ヶ所ずつある男女共用の便所を
備付をしてあったのを
こゝつまり千四百人を入れ
得る分位を出すことと
多く設けも割合ある二百段ほのあるひ、世話のあ
十五坪ばかりの平屋ひあるを、先づ狭隘を感じたあ
を修繕しても外のそなへと、角色ひあるのみを
が北をとる出来ずつき場を使
使ふ生じも第ハ年目ハ年目
したのである

早稲田大学図書館建築史

書庫ハ煉化ノ三層楼ニシテ其ノ建築ハ十三世紀頃ノフレンチゴシック、スタイルヲ以テ、堅実ナルモ、装飾ヲ施サザルモノトシ、北ノ面積五十四坪ニシテ地盤ハ花崗岩ノ二寸ナリ三丈三尺ニシテ、中央ハ厚キ防火壁ヲ設ケテ各々防火戸ノ設アリ上下合シテ六室トシ、之ヲ隔ツルニ鉄板ヲ以テスル例(印ヲ西ノ隅ニ)ノ煉瓦ノ厚サ(北ノ面積十三坪八分六厘)中央ヲ閲覧室ノ通路トシ左右ノ二室ヲ図書収蔵室他ヲ事務室ニ充テ、閲覧室ニ通ズル通路ハ防火戸ノ設アルモ、書架ニ充ツル部分ハ七尺奥行八寸(長サ七

八五寸、六尺八五寸、巾尺の三種あるも
巻数武のもの合計四十個、合して三百四十個を撰出し
得べく義書を和漢書を合して凡そ二十一万冊を容る
べし、今玄関の梯子あるも昇降す便し、なお三層を半
通せる昇降台二個あるもて書籍の運搬に便ず
今現在有する所の書籍を数するに十八個、総計一万六
千八百十部、三万六千三百三十三冊（三十五年月調）なり
外に寄托書八千冊あり
閲覧室を本館二階中央に地歴を軒桁まもの方さ
三尺二尺五寸四方の両板を廿五保あり、通じ庫あるも
書籍を置くべし、梯子脇二個あるも撰ず

の昇降す便なり、梯子脇の東方（即ち書庫に面する方）に撰出
十五人乃至二十人の閲覧者を入るべき小室を各々二人宛して四
室あるも其の三を特に閲覧室とす、壇の左右に数個閲覧
室とす、中央に貸出室あり、壇の左右に数個閲覧
室の外に図書目録の陳列あるも閲覧室の机は左の如き
ものを使用す（上下に振分るもの）を
使用する五十人の閲覧者を入るる迄に定員を満
セカアのベットを置きも迄者を防過するの法を為
すなり、現今講堂を特設を為す閲覧室二階を為す講
堂を之を用ふるのみなるも四部の
階上の閲覧室を下室の貸出室と同じく仕事に用ふ

寄宿舎ニ於テハ、上下ヲ共通ニスル昇降機ヲ設置シ書籍ノ運搬ニ使用スル筈ニテ其ノ機械ノ概況左ノ如シ

閲覧室机寸法及ビ員数（統計右四個）

符号	長	幅	高	数
イ	八尺五	三尺五	二尺五	二〇個
ロ	六尺五	三尺五	二尺五	三二
ハ	六尺五	二尺四	二尺五	二〇
	二尺五	二尺五	二尺五	二
	二尺五	二尺五	二尺五	二
	二尺五	二尺五	二尺五	二
	二尺五	二尺五	二尺五	二
	二尺五	二尺五	二尺五	二
	二尺五	二尺五	二尺五	二
	二尺五	二尺五	二尺五	二

明治三十五年五月ヨリ同年十月ニ至ル 建築費

一金四萬千四十円四十九銭九厘　建築費

内訳

金七千六百四十二円八十九銭七厘　書庫

金七千一百四十四円七十銭七厘　閲覧室

小計金弐万八千二百九十二円四十七銭五厘

金弐千三百三十二円七十四銭　事務費

金七千萬十一円二十八銭四厘　雑之部

以上

外ニ

金弐千二百七十八円　　祿科之生和彦
　　雲州役金費

書庫建築費之部

一金壱萬四千二百八十九円七十壱銭九厘　　書庫

内訳

金参千三百四十六円四十一銭　　木材費
金壱千八百十七円九十八銭　　石材費
金参千五百六十九円九十四銭三厘　　煉瓦費
金八百四十一円三十五銭三厘　　地形費
金五百八十二円六十銭　　家根費
金五百六十四円二十銭九厘　　建形之代費
金五百六十円三十三銭　　建具費

金五百四十二円五銭　壁及ペンキ賃
金七百六十三円八十一銭九厘　鐵材賃
金三百五十八円四十七銭三厘　下屋賃
金千二百六十五円七十八銭四厘　上屋拵賃
金弐百二円　職工人賃
金六百七十円八十銭　大工賃

計
金壱萬四千二百八十九円七十二銭九厘

閲覧室建築之部

一金壱萬四千四百弐円七十銭六厘　閲覧室

内訳

金五百四十四円七十三銭　鐵材及拵
金弐千四百二十四円四十四銭　大工賃
金五百十一円六十二銭三厘　石材賃
金七百八円五十七銭九厘　煉瓦賃
金三百四十三円三厘　地形賃
金四百十円十八銭　家拵賃
金六百四十四円四十一銭七厘　造方並代賃

金弐万七円八十二銭　建具費
金六千九百十四円二十銭九厘　木材費
金七千三百二十円九十五銭六厘　砂石壁ペンキ費

計
金七万四千四百二円七十銭六厘

事務費之部
一金弐千三百三十六円七十四銭

内訳
金七千四十円四十八銭二厘　給料手当
金九百六十八円十七銭一厘　土木費
金百二十一円六十七銭八厘　消耗品費
金九十銭　通信費
金八十一円八十三銭　器具費
金百二十三円六十七銭九厘　雑費
計金二千三百三十六円七十四銭

新(陸口)之部

一金七万萬十一円二十八銭四厘　雜之部

内訳

金千三十五円八十二銭三厘　廊下費

金四千百四十一円五十八銭　器具費

金七千百十一円九十五銭五厘　四時雇傭費

金千六百十九円四十銭　事務不繁ニ付同事務ニ代ル者ヲ置ク費

金千二百七十円五十五銭　雲梯費

金八百二十五円九十七銭七厘　仮設廊下費

計金千十七円二十八銭四厘

○図書の流しの序を図書の縁を伝ふるやうにのまひ
あるべし、たとへば図書を流すにあたりて書籍の
書の高下を見て伝授の極のものあるべし、若し之を利用
せざる場合にあるときは之れを捨てて他の書籍の後援を求むること
図書館の之れを採用するに当りては、唯だ之れを漸次
其の方法をして行はしめざるべからず、流れを汲みて源を
究むるが如き、大抵図書館の使ひ方を一丁字たりとも加へうるべし、之れを
即ち社会を流しを待つものとなるべし、大抵図書
館学の為に社会の為に其の自家任務を尽す

[illegible]

○外国人を或る程の高位に登用、北洋艦隊のエンサイクロペディヤ、ブリタニカの見本を送りて来たかと[illegible]、[illegible]書物の[illegible]を送ると云ふ事[illegible]、[illegible]エンサイクロペディヤ、ブリタニカ、[illegible]印二十四冊を縹列したるのみを擬したるものにて、背皮の色も光沢を来す真[illegible]迫目つて[illegible]、[illegible]文字の横数巻を高標[illegible][illegible]ばまるで書物の[illegible]る、さて此の模擬を二十四巻縹列の模擬にすること之を迎へんばかりに人[illegible]表紙の板を豊にして、其の[illegible]中の日[illegible]印合[illegible]ものの[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]

このの家敷も定めつて居るが、用意周到のものである、流石に外人の高尚美麗の趣味を有することゝなんである

其の一部のわるい、青色のごとき所は、明日御覧に入れます

まだ御覧みもすまぬ、書面のみにて、費用をこれ程に出すけれども

なんらか御覧まもなくまた出来るを要するもあるべう

右指の間を金こうあるを以て
こ、傳家ひ山伏ら三井七郎兵衛ひ
あり、借屋ろうこう土蔵附屋を何とかこ新築す
よいこうひあり
○三井家西本の三池の炭山を東洋ひ五数の大炭山ひあり
こうこうこうこ

海の中ほどの高一分位より約一千二百三十方呎ひくく、下ル
大阪市街の全部の量と同一ひくく、掘ると其の
排水ポンプ大年四月ととなり河流を通じ其の海の注ぐ
ものより毎年三千噸の石炭を産出す船積場
となるべく、新たに地の三千噸は往来の大海、安の海
浦落三、及び安の系となる五坑より採掘する数
ひ高ひより見たる大の新坑萬田を以て
漸く採掘の為め設ける所坑を其坑と
日二千噸の出炭のある筑豊石炭の
系統の坑を地下四百呎の所を採掘しそこの
萬田ひき地下九百呎の所を採掘するのである

東京棧原製

が沈んや其の地下九百呎の坑底で数百の日つて
の目の粉を坑道が百ひ各坑道を繋ぎ
うん電燈が燈やき畫夜ともなく石炭を現ひ
断へず労働を続けること

○ちうしゅ（ちゅうしゅ弾丸の意）に関ひ大阪のお橋
をとろうとしたこと（ちゅうとうとしたこと）いろいろ入費のこうる上
風をしたるおもうかつその一法を其のふ大阪
とひの関を通ようと湯殿ふ芝浦船ふあつ
ひ、うえうの関を通ることできる大阪のお橋は
を今の新橋を取り投げ込もひ通ずる、そこで
陸上ひと芝浦の間を全国之少毎を出しひ其の

飛脚等を拵ひ元つて来信を書もしたことも出あ
る

○塩原君の考へでは元流しひあるもの、獨逸のライプツ
ヒの大学図書館、また倫敦図書倫理人のごとく便利の
りろ〳〵風さんとあるを中心に遠方にまでも出
張行を図つて恰も動産のごときものの高と出
来たるを、その中に大学の図書館ひあるは図
書倫理協会用紙を作る書名を書いて
えんを采の中に投げ込むひとくも、百の内を大
学図書館にまいこの清水書を集めるものあり
図書館ひあるこの清水の考へを調べて出して

東京原製

三書表紙を作る時に用紙を作つの及
ぶすまを作るの如き一日時間を作つの及
石の如上海の清水書を誰ひも得られるひあ
ると思ひ、大学教授が是を思ひしに人に頼まるひこ
の清水書用紙用を時のうちに大学の
の流の流をお考せられんとの事に此の
方法を図書館と自家の清水する書籍を編入し
貸借出入手続の元んに便利と思ふまいとの意
し一安を出あ、清水人に高知(佛)する便利が
開けとなる事
○指きつの松のもきの白河べに

[illegible]市内の橋を総数四百六十八あるうち其
の面積が一番多いのは三十八坪四合、其内織橋が
十九坪四合の三千八百七十八坪六合、木橋が二百
九十九坪四合が八千八百九十一坪二合、土橋が八
十四坪二千三百九十坪九合、石橋の百四十九坪
四合千六千八坪六合、其の石橋の中が百十八橋を
海渠なかにあるが、[illegible]以上の橋
を一度の写生改築する[illegible]織橋の
二、木橋が二十四万[illegible]十四坪[illegible]費を[illegible]
と修繕と[illegible]方合して木橋の[illegible]方四内[illegible]
十一万四千織橋の[illegible]方四万[illegible]二十万四[illegible]

[illegible]

[illegible]

○いがこの[illegible]単純[illegible]を記[illegible]
[illegible]少[illegible]の[illegible]明[illegible]
[illegible]を材料とする[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]を用[illegible]
[illegible]
味の探すべきものある

繞口令兒

繞口令兒は我邦で云ふ「坊主が屏風か屏風が坊主か」だの又は「長持の上に生米七粒」なんどの如く繰返して云ふ程、口がもつれて云ひ悪い所の言葉で小供の口を慣す爲めに子守なんどが唱へて居る之に意譯をしたのでは何等の妙味もなくさればとて純粹なる支那音の變化を現はすことは甚だ困難であるが止むを得ず片假名で傍訓を附けて置くから鳥渡序でに讀んで見玉へ

○

山前頭有一個崔 組腿 山後頭有一個腿 組崔 二人 山前比 組腿 不知道 崔 組腿的腿肥不知道腿 組崔的腿 組

○

吃葡萄不吐葡萄皮兒不吃葡萄倒吐葡萄皮兒

○

一個 長虫 鑽 船倉 門後頭有個破土碗頭兒

○

八爺門口兒有八棵 芭蕉樹 接 南 飛來八個八哥兒要在 八爺門口兒八棵 芭蕉 樹 上住 八爺拿巴達棍兒打接 南 飛 來八個八哥兒 不教接 南飛 來八個八哥 兒 在八爺門口兒八棵 芭 蕉樹 上 住

子守歌

最も罪のないものは子守歌であるゐとは何れも昔からの言傳へで誰が作つたとも分らない固より新らしいものは一つもないので支那全國四百餘州少しづゝは違つて居ても大體は同じゐとだと云ふ子守歌の節は頗る單調で小供の寢中をポトン〳〵と叩きながら寢む氣な聲で歌へばそれで宜しい原文のまゝだと至極面白いのであるけれどもそれでは分り悪いから日本文に譯して見たが甚だ不味い

○

丸い薪木でれ釜を燒いて、れつかさんは拍子を取り、れとつさんは歌ふ、歌ひ〳〵、夜明けになつた、此兒を何處に、何處に置かうか、鍋の上に置いた、れいしい、れいしい、糊を甜めてしまつた

○

一つ二つ、三つの木切れ、れ花が五つ、れ錢を數へ、木の杖六つ、銀の杖七つ、れ花を打いて二つに散つた、何にが二つ、馬の靴が二つ、何にが二つ、二本の棒が二つ、五本の鐵砲、何にが五本、牛の皮の太鼓、其牛どうした、手毬で突いた、突いた燕の巣燕をどうした、絲でくゝつた、其絲どうした、牛着丸よ、鞍馬の山で、天狗にあつた天狗の鼻の、鼻の先きとまつて、れなかゝいたむ、れなかをどうした、瓢簞でたゝいて、吹竹で吹いた、れ婆さんの鼻へ、灰が一杯つまつた、

○

桃の節句、桃の花がさいた、大きな姉さんがれ酒を飲んで、れ次ぎの姉さんがれ酒をぬくめて、れ次ぎの姉さんがご馳走はゐんだ、履うて往かうか、買つて往かうか、花の轎へ乘つて、れ嫁さんに往かうか、れ嫁さんのれ土產に、眞紅で小さい、鞋が二百眞紅て小さい、鞋が二百

○

一つのれ星さん、一つのれ月さん、滿洲犬が吠える、あれはれ前の姑子

○

何方が私と、遊んで呉れる、マッチをすつた、火がパッと燃える、甜瓜を賣つた、甜瓜が苦い、豆腐を賣つた、豆腐が崩れた、卵を賣つた、卵が轉んだ、內に居た兄さん兄さんは出て來て煮豆を買つた、內に居たれ母さん、れ母さんは出て來て線香を燒いた、內に居たれ孃ちやん、れ孃ちやんは出て來て灯をともす、灯をともすとき、鼻の孔を燒いた

○

れ日樣が上つて窓の障子が紅い、れ父さんはれ馬に乘つて、わたしは龍に騎つて、れ父さんは町へ、わたしは海へ、海の東のれ家は十間の長屋、九間の腰掛、れ爺さんは出て來て丁字杖をついた、れ婆さんは出て來て地べたを匐ひ廻はる、息子が出て來て目くらになつた、嫁が出て來て啞になつた、富犬の足が、三本になつて、富猫の尾が切れて飛んで仕舞つた

○

アバタの人が木の上へ上つた、犬が吠附いた、アバタの面で齒を喰ひしばつた

○

小さい嬰兒さんが門の敷居に座つて、泣いてる、泣いてるね嫁さんが欲しいつて、ね嫁さんを貰つて、そうしてドーする、靈を點して貰つて、話をして貰つて、夜が明けた時に、辮子を結うて貰ふ

○

赤犬や赤犬や、ね前は留守してね出で、わたしはね里に往つて、梅の花を採らうよ、枝が高くて、梅の花は採れぬ、ね里の家でね團子のね汁、鍋の中の團子は、ゐろ〳〵ゐろがる、ね爺さんに一つ、ね婆さんに一つ、机の下へ一つ隱して置いたら、猫の兒が食べて、犬の子が舐めた

○

榎の木の下へ舞臺を造り、大きな姉さんも小さな姉さんも皆んな來て見てるに、家の姉さんは來ない、ね孃さんのね入り、ね孃さんのね入り、小さなね馬に騎つて、大きな傘を差さして

○

大きな鋸もつて、大きな木を挽いて、ね家を造つて、ね嫁を貰つて、嬰さんを抱かせて、東に匐廻り、西に匐廻り、父ちやん〳〵と呼んだ

○

棗の實が澤山生つて、棗の葉が綠に茂つたね母さんがわたしを生んでたつた一人子可愛い一人の娘、金の盥で洗つて、銀の盥に寢かして、大きくなつて、ね嫁に往つたら、わるい姑子、十人の叔父さん、十人の叔母さん、大姑も小姑も、十人づゝ居つてわたしをいぢめて、水汲みさせる、水汲む繩が、手の掌へきしんで、痛んで〳〵、餘りつらいので、井戸側へ上つて、里の方をながめた、井戸側の下に赤犬が居つて、手を喰ひついた、里の門の前で、鷄が鳴いて夜が明けてしまつた

○

ね腹が痛んで、ね醫者を呼びにやつた、ね醫者さんが留守で、ね弟子を賴んだ、ね弟子の人は物賣りに出掛けた、其ね母さんを

東樣屋製

賴んだ、ね母さんが豆腐を煮て居て、鍋の後に、蜆が居つて、足の尖を螫した

○

雨が降つて來て、蝦蟆が笠を被つて、黄瓜の蔭に隱れた、黄瓜を取りに往けば、大きな蝦蟆が、ノッソリ匐ひ出た

○

大風が吹いて、大雨が降つて、大きな〳〵和尚が、大きな大鼓を搗いた

○

頭の禿げた、ね爺さんが豆腐を煮て居て、わしが一杯喰べて、人が一杯たべて、ね爺さんのが無くなつて、白い眼で睨んだ

○

子守を置いて、留守居をさせた、米を偷んで、米屋に賣つて、ね菓子を買つて、ねでんを買つて、餘り澤山喰べて、ね腹が痛くなつた

○

犬の子がワン〳〵吠えて、座敷へ上つて、花瓶を翻して、疊んだ着物を、かきちらしてしまつた

○世界の必要と霸権を争ふに海の要点を占むるを主とす
之れを陸地に於ては国内の多少の必要あるを以てナポレオンの
如き土地を開くこと能はざるを以て人口を養ふべきものなく又た
土地に生ずる者の之を輸出するに西洋諸国の如き殖産の盛なる
者を之れを要するに殖産の盛なるに西洋諸国の如き商業の
盛なるものの如き者なり、故に船の多きを以て海の要点を占むるの
陸地にあるやうなれども人類の霸権を争ふ
也土地の多きを以て人口の強きを恃み海を陸のごとく使ふ一定の
[illegible]

獲するを目的とする一定の海軍を設くるは
即ち英国の[illegible]の牡蠣の養殖を奪ひ
陽の「牡蠣之田獨我蓋」と称したるが如き事前に
行したるのみなら、又伯爾の[illegible]伏老の養殖を多大
したるの者の海の沿岸にあるを蛭の養殖を久しく
沿岸にあるを以て[illegible]
世界の海軍を[illegible]
七二九年の西暦[illegible]
の国際公法[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

抵の陸兵をもつてひとつ〳〵我邦のこと〳〵く海を
併せ全国ひも抵ハ[illegible]
るの要害を論ずるなり
○[illegible]海のごとく海を[illegible]
[illegible]ハ、全部国の採海用汽船アルバト呈弾の乗位ハ
の[illegible]ハ太平洋中我等を利する海を動抵
抵を採取を試[illegible]日本近海の[illegible]俄比其の獲
抵の数を[illegible]すと[illegible]一体[illegible]中動抵抵の[illegible]
[illegible]中[illegible]数[illegible]限[illegible]
海[illegible]抵の[illegible]伊[illegible]の子一[illegible]
[illegible]、北米合衆国のフロリダ洲沿[illegible]のごときを其

つ[illegible]
○[illegible]人民[illegible]一[illegible]
[illegible]中之[illegible]の国民を[illegible]瑞典郎
[illegible]コンブを[illegible]英国[illegible]
土の[illegible]民[illegible]海[illegible]の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
き[illegible]
[illegible]七敢[illegible]異[illegible]
[illegible]膳[illegible]
う[illegible]
[illegible]

[illegible]

政をせしことを考へ合せ

○宮殿の内部を造るに高さ[illegible]間[illegible]

[illegible]と云ふことが如何なる物

[illegible]

[illegible]

○日本にも軍人に兵隊の[illegible]

[illegible]の明瞭なる[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の方角を[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東京博文堂製

○仏教は天竺の本国なれども今日は仏教経典を
[illegible]三億万の印度人民の中に仏教経を信ずる者
八億しかるに[illegible]
[illegible]
○[illegible]トンキン流の[illegible]皆
工業相応ひ[illegible]ビシユニユー教とシバ教の大
[illegible]力をもつて印度の天下を二分して各其一を受つ
てゐるなり[illegible]
○ビシユニユー教は猛烈[illegible]を崇め祀る宗
[illegible]男根[illegible]北牛[illegible]
者の教徒は額に赤の指環[illegible]赤の左右に銀

白線を畫き木綿の切をぐるぐる巻付けし茶
[illegible]い落葉の衣を着け首の廻りに木賃を珠数
のごとく集めて掛[illegible]
リンナン印ち男根の[illegible]
[illegible]牛糞を焼いて粉となしたるを[illegible]
び[illegible]
○印度[illegible]の世中に猛烈の異教の[illegible]
者の他の種族[illegible]
(綿の糸を集め[illegible]九四師を撚[illegible]三師[illegible]
さ)を掛けて[illegible]
の[illegible]

真心の器羅つかひもちいのひもを生んでは、
縄を長くして人骨を巻きつけて墓所の縄とする
生きてゐる人骨を巻きつけて墓所の縄とする
ものとして生きてゐる人骨を巻きつけて墓所の縄とする
ものとして生きてゐる人骨を巻きつけて墓所の縄とする
ものとして

は古語 Aquitania と称せられ現今の石灰質の山腹は
殆ど奥行きの深き穴を穿ちたるもの多く殆ど穴を
ばフランス語で Abri とよぶ其一つを La madelaine
の穴とよぶのぐりみつて此穴は大古人類の遺物の住
居及墓所なりしなり殊に有名なるものはマンムースの
ールマンムースの牙も其中の一ひとつなり
一体フランスは古代哺乳動物の石灰洞がみつて其内部の
骨や角や骨角等の出るものあるも古生物学の為、考古学の為、人類学の為
研究を以て極めて重要なるものなり
ラマデレーンの穴もフランスの考古学者 Edouard

Lartet 氏とイギリスの馬学者 Henry Christy
氏との合同調査ゆつて学術界に紹介されたるなり
研究の結果を Reliquiae Aquitanicae とラテン
語の題名で出版されたるが本文はイギリス文にて
リます
彼の彫刻する牙は Lartet 氏が Falconer 氏及び
Dr Kernuel 氏の研究を以て獲たる石灰質の附着物
五つの小片を附せるものなりしが
の痕の残る後の人を私にするものの真の価

体を立てる現のんきのつとのひちりもん
丁鄭に結きををてをををを意味の二蛔の形
ちちちを石鉄を以て行う獣の形を書き示したる
形をえんをを来たに、そこひあを表面の附着物を云
つて解く注意しをを物の形象を意の形を形う現ん
を来たのひちりまん
一方の端をを小さを用のみをもををを耳を無ん
たに形と見しきをのをあをを頭部の前をを下をを上
を及を上つたに牙の形ををををををを、他の端をを糸
を来形たに形を尾の形をのををを長い毛の生を
ををを長を書いをを、是ずの形点を保持しを見をと

東京博覧製

牝書を示を曲の長い牙、糸を来形たに形を尾及び身を
覆ふ長い毛を有をを、尾をしべりやを粧を氷を開が
ををたに使ひ為をををを形を形マンムースを示したをを
思いをを、形をを牝牙をマンムースの形容をマンムー
の牙をを表をを形ををを来つたのをををを
牝ををのををの牙の為を保護をを使をを
を使ひ解く牙の形を誤ををを左右を解ひををを解
形を書きをを牝形をををををを解
牝のをを長を長いをを牝をを大きを現在印の
保存をを八寸許をを牙を文埋井の国を保存を
をを多い形を大を書いををの実際ををスウト

細かく分類せんとする者

第二図 Prehistoric Times (Sir John Lubbock)

第三図 Early man in Europe (Charles Rau)

第四図 Primitive Man (Louis Figuier)

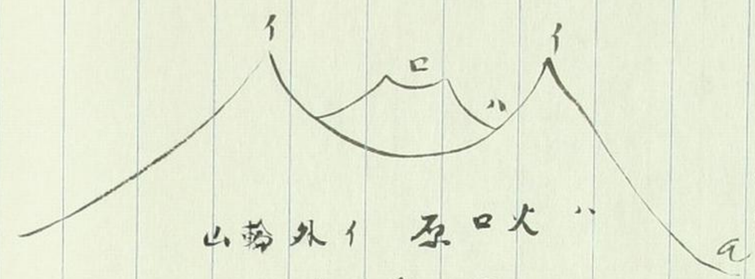
第五図 Anthropologie (Dr Broca & others)

山岳崇拝

○理学を研究する者は山脈中火山系を登つて地層の分解を考へる事面白味の少なからざるも出入せる、峠に昇る道路は一つの道を選び山を登りて甲乙の分れ目を考へる様なる

例を取つて説く者は一面形を識別する旅行者の丈の西の傾斜にあるを嶋駅と称し漸次美形峠の道をたどりて先まづ傾斜の急なる峠を例とする為め道路を下つて美形峠に達し例の吹媚の湖あるを見たるの火山の理を一トつ見り知らるゝ所なり何等の成因なるや実に三嶋富士の旅行を初めとする火山の外輪山の外側を上る傾斜の急なる峠を識別するを成すものゝ外輪山の内側を下るこゝにあるのみ、夫の吹媚の湖の如きは火口原の多溜ひあると思はるゝ旅客も此辺に憐れむべきを得ます

今火山の名称を図示すれば左のごとし（イ）は外輪山にして、三峰ともに高きを例とす、（ロ）は火口原にして、（ハ）は中央火孔丘

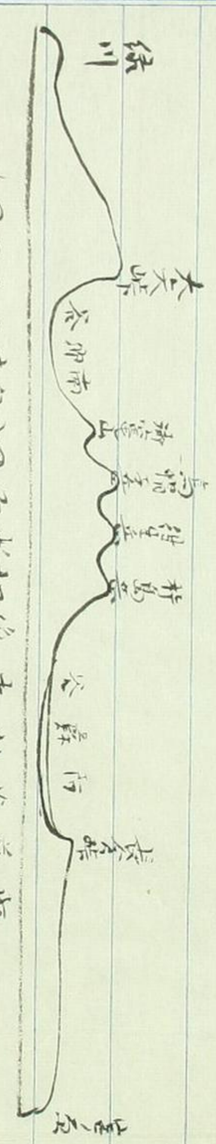


ことに高く聳えたるものにして、火口原とは外輪山の傾斜と噴出物の堆積とにより、ちょうど盆を伏せたるごとき形をなしたるものなり、噴火口は中央火孔丘の頂上にあり、その底は

噴火口ひあるとなり、西部を懸孔とするもとより、今
回中の口即ち中央火孔丘の頂上を火山と名づくべき
也とする所以也如出でたるものなり
今茲二一の大火山うちつて大槽の如く崩れ落き火
口うちしに出づる灰砂を降らし熔岩を流しこのかの
所見の活動も中止し茲午の年月を経ること一
更に此無噴火孔内に別個なる小なる噴孔を生じ此の
噴孔、うちしに又もや熔岩を流し灰砂を降らし此
うちとなりとなりを刻合を大なる噴火孔の中に刻合
の小なるを新火山が生ずると云ふことなるのである
此の中央の噴火口孔内に新たに生じたる新たなる火山を中

央火孔丘と称す
回内に生じたるを中央火孔丘も火山なるべきことと
つて称らい拵へたるものなり之此の時を以て
容易に生ずるものなりいい況して火山の起を知らざる
いうものなりとなり所謂なるべい隨て特に
前駆現象の如きを知らざるも一向疑はしきに、彼の阿
蘇山の火山灰の如きとなりを誰も火山灰と思はざるい
なるに、なれもその実、此の火山灰なる数千の人民う
ちなびき流れを叫ぶ声つてなるべし、其並に之れが
為の噴火口なりと思ひ人も多数なるいふ宮を
噴火口（今を火孔）の舊時仕たるなる

のひとつ



富士の絶巓なれとも噴出せる溶岩をとゞめしも

多くの小さき地膨れ沸の痕なる凹地しなるべく
多くの見へる雲霧等もあれ雲霧ひやなるべく
火山系の溶岩を以て見れば無味うるおひも
なきい、殆ん高原なるべく高原山なるべく高原を味
火の多き凹地しなのと思ひなし、常に大山仮田び
破壊した、その印なる物破壊しなるべく
多くなるべくなるべくひとなる十中ひなる多なるべく
品の説を新説し所説を以て
左図のごとく一山の多くの山の寄出したるものを富士
火山系に集副火山と称し集副火山を即ち
plex volcano ひなる而して集副火山の孔なる物の説

図ハ日ヲ山火似ル蒸南五山ヲ以ノミ方北山頂

横山博士の論ずる所

之れを火山の山體に潜在する活動能力のある刺

目を生ず地中の岩漿 Magma (一般に地球内部

あるいは岩石の燒融したるものを岩漿と云ふ岩漿が地

球表面に流れ出でたるものを熔岩と稱す)が地の割目

に沿うて噴出する山の中腹或は其の特殊の形態

的に成る火山を形成するものあり地下小火山と或

は又未の大火山と爲せしものあるべき理なり

地表に小火山を稱して爆裂孔 Parasitic Cone と

云ふ例、或は之を例火山とも云ふべきものなり地

中海中のシシリイ島にあるエトナ火山を爆裂火

山の數二百四十五に達すること云ふべきなり我が

富士山も三十九の爆裂火山にして富士を古くは

八朶の芙蓉峰とも云ふん自然的に成る線

東京原製

東京博覽會

変ちん一元し於ひ寺毛麁の因縁所の
山のことゝ思ひのうんゝ十勝ゝ於ける寶永○の爆
裂火ゝ寺毛国ゝ共の特産ゝ多くの家生火山うゝ
ひゝ、伊東百年祭ゝ之二隅ゝ寺毛高ゝ寺山ゝ
平隅ゝ、西黒隅ゝ寺毛五黒隅ゝ鐘ヶ山ゝ猿山
ゝ西北特産ゝ寺毛片岩山ゝ丸山ゝ野原山ゝ、
ゝ射場ゝ天狗山ゝうゝ、寶永山ゝ一寸人ゝ高生
火山の特ゝ思ひけんゝ昔毛即ち一つの爆発
火ひゝ於ゝ寶永年ゝ起ゝ爆発作用のあ
の山體の一部破壊ゝ寺毛大の跡ゝ寺毛あ特色
ゝ砂陸ゝ寺毛ゝ印分ゝ見ゝ寺毛ゝ

の他伊豆の天城山ゝ多くの高生火山ゝあゝ行所の
尚ゝ山ゝ高ゝ火山（十湖）ゝある
地ゝ毛ゝ高味ゝ寺毛ゝ解ゝ市山ゝ毛海ゝ毛ゝ
多くの流味ゝ寺毛ゝ所ゝ毛ゝ毛ゝ景ゝ美ゝ高
士ヶ山ゝ毛ゝ探討ゝ用ひゝ毛ゝ
寺毛ゝ寺毛人ゝ穴風穴脇ゝ寺毛ゝ洞
窟ゝ寺毛ゝ何ゝ寺毛ゝ寺毛ゝ
寺毛ゝ、寺毛ゝ千尺ゝ特ゝ
高高ゝの解釈ゝ毛ゝ
地獄ゝ穴ゝ塔山ゝ隧道ゝ寺毛ゝ
ゝ寺毛ゝ説ゝ寺毛ゝ

富士山の麓の側火山の多くあるを見て伝うるに亦不の風穴人穴或は胎内潜と称する洞窟あり。ここに地学洞窟の長さを定めは数十メートルん長きは数百メートルんを表し稀なるを一キロメートルの表示するものあり。殊に多くは大噴出物の富岳の風穴と云ふ大噴出物の中に於て洞窟を出来ることを、皆種々の説明あるが故に或は地下の迷路の如しとの説を立てるものあつたが猶ほ大山なる上熔岩流なるべきものと称するものあり。

とそのとおりなるべし大山岡を以て出来たる爪哇地方にあるものは地殼の熔岩とそのことのおのおのつひあつて、従て其の色を表示しき熱のわ導殺又冷却凝固するあ、内部は或久変赤熱の状態にあるを尚ほ流液体の有様ひあるその熔岩の一部が多くの傾斜を有する坂路を滑り落ちるときは外皮の凝固せる部分は其の異動を生ずるべきも内部の液体の部分は一部の自己の重量にて流れ出でて熔岩の壁を破るとも抜け出で出る熔岩の

管を発するものなる是れ則ち熔岩隧道の出来方
ひなり、
さんぼう熔岩隧道の天井及び側壁の上部は角の丸
則ち一しく熔岩鍾乳 Lava-stalactite を垂下する
ものなり（萬座の大日穴と称するものゝ如き最
完全なる熔岩鍾乳なり）或は洞窟の右軸の方向
に沿ふの凸凹線を生ずることあり（萬座の丸
音穴の如きを支加十五メートル間を並行する多くの
凸凹線あるも殆んど南の方向なる右軸面
に変向しなるべき熔岩鍾乳の多くを垂下
す）或は熔岩鍾乳を伴ふことなく単に雛壁状或
は波紋状をなすものあり、下底を多く泥濘ひあ
つて或るものは蓄水して膝を没することもあり、其の
指頭に吹きうることゝなる山東方のものあるが如
くは多の鍾濘状を呈し時として其表面若
色の金濘の如きものあり或は黄色の熔岩
流の如き又は貝殻状の波紋がある
熔岩鍾乳石は稀に例外的に内面孔のあるもの
あり或は犬歯状のものあり又細き蝸牛状のもの
ある、長さは短きは四センチメートル位の多いが中
一尺餘に達するものもあり、
熔岩隧道の孤穴を言ふに無味のあるものなり、

東京陸地測量部の大正のごとき地の隆起を示すものとみるべきもの
なるべしと思はれる即ち一部は海岸に行はれたりと思ふ其の塔岩
隆起の俗称と其の所在地を次のごとくである

俗称	所在地
駒州新田風穴	駒門新田村南端
大野風穴	須山村駒門新田の西方
十里木氷穴	十里木村の北十数町の所
観音穴	大宮町の北萬野村の田畝中
大日穴	〃
稲荷穴	〃

穴畑　〃

以上四つを俗称して萬野の風穴と云ふ

人穴	人穴村北隅
焼穴	〃
新穴	〃
鶴穴	〃
三ツ池穴	〃
青木原御穴	青木原森林中
龍宮	青木原
精進氷穴	〃
鳴沢氷穴	〃

長尾氷穴
小御嶽風穴
御釜
上船内
下船内
鐘子山雷穴

我邦ハ火山ヲ産ムヒ石ヲ焼ケルモ焼岩隧道ノ従来解ラサルモノ多シ此出雲国中海ノ中ノ大根島ヲ囲繞スル焼岩隧道ガアルヲ見ルノミ

高生火山ヲ見ル同ジ作用ヒ岩脈ニ生ズル

長尾村西北
小御嶽西北
吉田釜山麓二合
剣丸尾
仝 上
鐘子山南ノ中腹

東京原製

序ニ述ベタル如ク地下ノ岩漿ガ山體ノ割目ニ沿フテ表面ニ達スルトキハ側火山ヲ生ズルノヒアルガ表面ニ達シ難キ地中ニ於テハ即チ岩脈ヲ生ズルヒアリ之ハ岩脈ト山ノ表面ニ於テ容易ニ之ヲ認ムルコトガ出来ルガ火口ヲ中心トシテ輻射状ニ生ズル渓谷及ビ火口瀬(火口ヲ囲ム溜マリタル雨水ガ外輪山ノ一部ノ軟弱ナル部分ヲ打チ破リテ外ニ流レ出ルトキハ北ノ流出部ノ深キ谷ヲ火口瀬ト称スル)ニ於テハ表面ノ水蝕ヲ受ケテ部分ニ部分ニ異ノ貴人ノ姿相ヲ現ハスコトヲ出来ルノヒアル、平井二ノ言ル通

（ハ）の赤松火山を後へして九十一個の岩脈がちらばりその中
舊火口壁の十七早川火口瀬の二十一須雲川火口瀬
の三十二谷入沢の八、足柄茅三紀層の十、其他の三
ちらばりてあるも、是等を概ね大口を中心として四方に
輻射するの傾向のあるも、是れを外ひらい、雲をもて
火口を発する大砲の身のぬきうちにあるを指射
行ふとき、ちうを指抗力をもつて放射状の刻目を生
することを実験する事のあるも、火山も亦化之
れとの抗力をもつて高く抵抗する砂礫をあるときは
あの輻射状の裂目を生ずるのみ、此の裂目に沿
うて岩漿が噴出し道に岩脈をなし江ひあり

（抄山博士談話）

火口の大さは（きの）一事の考へ方を変ずる事のある
火口を通常之んこうして水蒸氣焔岩、灰、砂、礫等
を噴出する時の火口を飛ぶ大なる（きさ）ものの
ちうちうの北等を共の一部を火山のあの共の形を
なし江ひあるに沿岸し江ひあることを宣くらしく
ある伊木現象方式より阿蘇火山を曽て琴
ふるとき形態を有し江ひあつたのが共の後
多量の焔岩を比上する噴出しうるの結果、地下に大空
隙を生じ紀則ちしく陥没を生ず上の（ことの）現
象の火口と尤似すべきものあることとなるまである、又

平林寺等迄ばかり来火山を焼岩を流出する毒と共の
或今を填充し為めに其の大いさを減ずるのみ毒也
あるべし第一火山のごとき大火口（平均六〇〇米の計算
なれば第一の四火口を即ち南北の大径金
四〇〇米）勢振山なる山の距離約十二キロメートル
也東西の小径三四〇〇米なる磐梯山なる山の距離約
十キロメートル也其の面積は大約二万四千五百平方キロ
メートルとなることなり（獨逸浸蝕消磨作用
論の研究）を獨逸浸蝕消磨作用
列に出来其の海水の周囲を郡部の陥没し
たりしなるものなることなる一般に此くの如く

く陥没して大きくなるを大口を陥没火口と称
前述の如く噴火口を新しき火孔を生じたるのみ（日上）
を複火山或を二重式火山（compound volcano）と称し我
国に其例多しい所なる即ち横山地方の如く
石英粗面石の山なるなる
第一第二、阿蘇、榛名未だ芽を成ず二重式火山なる
つて第一第二なるを以て第二峠、長崎
峠、潮風峠、雲仙山等を外輪山なる弥山、
函館山、二子山等を中央火孔なる宮城野、仙石
原、芦湖を火口原、早川及び須雲川は火口瀬

ぢやと、阿蘇のあるを大矢峠、古人峠、二重峠等
〃外輪山ひあるも、五岳中央火口丘、阿蘇谷等
印谷を火口原である

○二月廿九日　晴　今八ようやく、どうしてもやうと思つ
てゐるを（二月十九日）てざ〳〵話ねば、書を出ひ面
さんにうつ、元敵（ぞ）、徒原を出ぬどうしうを少之
て居ねば、何分例の男爵ぶるまい、此方氣能
のうるいなれば、殆ようやく、出けるも入原博士の論
文をうふなを立ようとうるとうとうも殆ものよ〳〵ふ
い様ひある

今の所の完分保生しこのいと思ふうつこ言ふ
うと思ふていろ〳〵注意しなの年月もうるれば
ん候ひ、報ひまとをてつひ
事ようるひとを流うう、自ひ話ねを演劇の海
つなぐ、余を左の如き詞を書しひ、人をを自分の書
いとふ流を芝居を演ずるのを見ひ、いる或ずるこの、概
して満足する思ふの明ひ不陽之の思ふの
ひ関する為しん研究をうるを、偶を自分の書いひ次
必ずことを従者を書掛ひるこをもあるを思づ七分
思ふをを自分の思つひ思ふを行うるひ不快を思ふる
ぶるい、

きう「夏小紬」のお染を演じてる牡丹屋敷の小島文衛
とふ奴を実々エライ研究して若者の考へ出した以上を考つ
て居る、これを不思議と云ふ外仕方を持ち得ない
山人又曰く初め伊井蓉峰が夏小紬を着るといふと
うるさい物の一を捨ひて来たれば、座長の言葉を打壊して
も困ると云ふ所から「キヤツ夏小紬」を演演
したとうで、流石にこの小説だけは、あまり面白
新聞の方はちん投に
何を云ふも道具立ても立派のあるのに、牡丹屋敷のことを
仕出しが不完全で、美人を拾ふも術無を着る
能わず、深山幽谷の景を出すも壊れて皮の剥げ

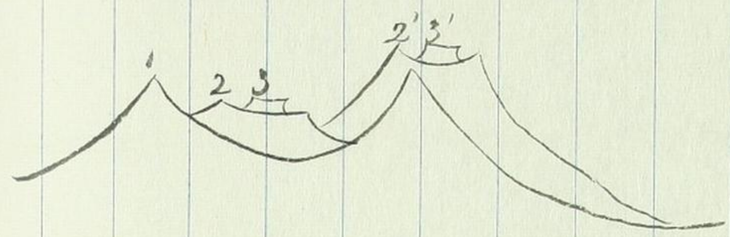
1に山や石を用ゐる故うつくしき役者なれば
ものもせく生まるこゝろとも
江見曰の意の譯しに「ヲセロ」うつ……あれを川上等の
者でもこれといふ者と新聞でも書うセにもあるこゝ者を
を主演うも人物をもつ人、そのある事化の「ヲセロ」
目と合ものあるこゝ方下ん考も思偏のこゝを
長いとこゝ
川上等を外国ひ者と世界をこれ云ふこゝを考て文化
感じこゝ、これを考てこれ云ひ和とを考るけれども
実を吟一つこれを考てこれを吟つこのこゝ者あい、先ず角
これて事に成る成合うこゝ合のこゝ高もあるこゝ、所等

大人と呼ばれて寧ろ習うを得るの
金を森鴎外の『玉篠』西浦嶼のことを語るとき
四て流れて名人ひとりの「自然」を「事業
をなすべきものを生殺与奪を用ゐることのこの
と問ふて彼の言を聞きもし彼のこの個性
のみを用ゐるとも何のこうこれ方もあるべし
又たまきを或を何の思のあるものかと用ひ
なるものもあるべんう
彼の人間どろ小波を乱せるを獨逸のタレ
フレーザルとなくるオペラ作者、タレフレーザルとなる
の慶物を編編もるの故内容浦

爲の似ることのあるも、森の心を記しとなる或を
地のオペラを作るで、自らも試みしまるさるう
壮士俳優を者ちもるを寧ろ(ぎ)作る作
一寸のそひて見るひ寸言の方を創る
いるの自然しこと

○青森を森林ともまし名を餘市湾の打
ーモイ」即ち「地の湾」と云ふ説もあり轉記せしあり
おかと赤かス金昇ふ赤の金

○火口丘の中央火口丘を生ることを
云ふしが、元を二重式又、更に三重式とする場合
もあるも、この三重式の例を前に記すべ今うしを添



くらしてそうろう、ここに補記すべきは、ずいぶん遠の山岳
山をいうべき地の三重式火山ひあるべ、即ち
山崎富士の図を示せば上図のごとく
そうろう(1)が第一の外輪山(2)が第二の外
輪山で日光は第一の中央火口ひあるべ
(3)が第二の外輪山の中央火口ひあ
る

○久保方法を四書の由来を尋ぬべ大学の中庸を乱し
ハ左のごとくそうろう
四書の中「論語」はもうしこと、孔子の説話を記したる
ものにて弟子の編纂ものにて、二書と
も孟軍獨と行われたるものにて他の二書と共
に「礼記」といわれ書籍の中の抜粋にて「大学」は
第四十二篇「中庸」は第三十一篇とそれぞれ
のべ、孟子も軍行しこのびもとくに、又特に之を論じ
たるものもあいなびもしくに、高し本来説話のあ
りしもそうなるべきもの

東京帝国大学
理科大学
地質学教室
撮影

の文部省に於て宋の中庸（即ち程伊川）程明道
といふ人名を考へ出だされ教化の中心
引き抜いて教科書の教材とされ之れを論語孟子と
配し、はじめて儒家必読の書と定められ
たるなり孔子一生用ゆいつの日ありと天皇の御字
清原教業といふ儒者が天子の養し禮記を収むる
ところ、大学中庸のこの二篇を聖道の極を論じ書く
備はらざる点なければ平生敬慎あるべき書と二書を
抜出し分本にも掲げ聖意あらしといひ天
子大いに之れを感悦さんとせられこの教
業に二程子らもかつて人びと面の名

聞くべきところ物もあしかりしも一奇とすべきかなる

東京原製

東京 株式會社製

東京横浜製

○早稲田大学図書館の沿革を紀念館に掲げ載する
余の談話を基礎として概略左の如し

本館の前身なる舊東京專門學校圖書室の歴史と云ふても特に語るほどの事は無いが併し是非小沿革が必要だと云ふから覚えて居るだけのことを語らう」

東京專門學校創立と略ぼ時を同うして設けられた圖書室は、今日大抵の人は其の位置を忘れて仕舞つて居るが、確かに今の正門を入て右手の講堂の階上に八畳敷ばかりの一室があつた、これが当時の圖書室で、今は大きな講堂となつて仕舞つて、当時の閲覧の工合の丸で変つて居る、当時は一間半位な粗末な書架が二個据えつけられてあつたけれども最初は十九に陳列せべき圖書は一冊も無かつたのだ、勿論草創の際であるから、書籍など買入れる餘力のなるべき筈も

無い、そこで已むなく大隈家に託してある書籍を
譲られたのは一つ貰い、又当時の校長英麿君の外
國より持ち帰られた其他職員よりの寄附された書籍などを併せても、前項
の二架にはまだ空虚の多かった位で、誠に見すぼらし
い有様であった、併し免る角斯る草創の際に不完全
なから圖書館じたものを設けたのは、他日東京專門
學校を大學とする迄の抱負があったからである、乃ち
此の抱負から創出し、圖書館の種子を早く蒔
いたのであるから理想だけは誠に立派であったと言
ふて差支あるまい
如此して先づ圖書館の卵子が出来たが、其後開校

なく教場擴張の都合により、此の卵子は楷下に
移された、即ち二ヶ先達まで事務所であった
掲示場の隣室がそれで彼の煉瓦講堂の階下に書
庫閲覧室が新築されるまでは古くにあったのである
此の間に多少の沿革は無いでもないが、精記臆にべき事
は此の間に圖書に著しい増加を来した原因の二つある、
それは特に言ふて置かねばならぬ
第一回は明治十八年に學校で大改革を断行し、月
謝を壱円八十銭に増した代りに、學生に教科書の教科書
を無料で貸渡すことにした、それがため少からぬ費
を買ひ込むだ、それが纏まった金を出して纏まった
書物を買入た始めである、しかし此の圖書購入費も

実は大隈家から支出したので、学校の手元はまだなかなかこれを出すほどの力を持たなかったのである

第二回は同校会の団体が学校のために銳意図書の増加を計った事でありまして、まづ一寸当時の生徒の風を申す必要がある様に思はれます、当時は学校の創業時代であるから、生徒も学校の事業を自分の事業のごとくに思って、其の不備を見ては之れを完全にせねば氣が済まないと云ふ様な塩梅で何事にでもヒドク学校に同情を寄せ、進んで学校の仕事をたすけた、乃ち図書室に陳腐の古本ばかり集まって居るのを見て、当時の学生はこれではならぬと自ら奮発し、学生相應の醵金をしてぼつ〳〵書籍の購入をはじめたのである、勿論一時に多くの書籍が揃えた譯では無いが、兎に角これが端緒となって追々新刊書が集まり、終には和漢書は斯会の蒐集に任じ、学校は主として洋書の購入に力を注ぐ様になって、学校も大いに此会に依頼した時代があったのである、今度図書館が新築されたに就き、同会は其の書籍全部を学校へ寄附せられたが、其数は総計四千餘冊で、左のみ多いと云ふではないが、最初図書の最闕乏したる際に補充の任務を取った同会の功は図書数の歴史に特記の價値がある、

右の二回に渡り若干図書の増加を告げた、しかし稍図書館らしき体裁を具へたのは、明治二十二年煉瓦

講堂を造營してのらである、即ち新圖書館の出来るまで圖書室に充てゝあつた處で、今の学監室が書庫、教員室が閲覧室、編輯室が事務室であつたのである、此建築は先に角圖書收藏庫に閲覧を目的として造營せられ、便利も体裁も舊圖書室の比では無い、しかし其の規模は猶甚だ小さく、書庫の容積は今の書庫の五分一にも及ばなく、隨つて閲覧室も同時に五十名を收容するほどの出来ない位で、それに事務室は日光の取り様が不完全で白晝でも薄暗く、執務に困どゝ不便を感じた、しかし此に幸抱して新圖書館の出来るまで十年餘りの間四萬以上の書籍を入れて置いた所はたゝなのです」

しかし此当時圖書室は稍体裁をつくりましたけれど、学校の餘力はまだ書籍を購入する迄に進まなかつた、無論事務費のおとときは節し得るだけ節したので、長い間給仕を合せて僅に三人の事務員が、圖書室一切の事を司つた位で、帳簿のおとときも目録の外は殆と整頓したものは一冊もなく、石井事務員が一冊の備忘録に、一切合載書きぴんで、八人藝をやつて用事を弁じて居たので、今から見れば至極急き出光景でありました、又此時分同攻会員で無ければ同攻会の展書を見せなかつた處の和漢書、〻新刊の和漢書、〻書生の最も見たがる書籍は大抵同攻会所属であるから、勢として学生は入会金若干を納めて会員とならざるを得ない、偖又同

攻会は此の入会金を以て圖書購入費に充てたのである、圖書室も会員を多くせざれば書物が多く買へないから、会員を勧るには隨分苦心した、一時は学校所属の和漢書全部を同攻会の部屋とし、同攻会員にならざれば一切和漢書が借りられない様にして、入会会の怠慢をした事もあつた様です其後同攻会書籍の外尚他に学校圖書の不備を補ふたものがある、

之れは職員の寄托書を閲覧せしめた事で、其の寄托者の重なるものは坪井雄死、小川邑次郎西氏と、余であつた、其の圖書の総数は二萬冊近くあつたであらう、さまざま仮分にも書庫が狭いので此寄托書も閲覧に都合よき排置をなさんとの出来なかつた、

斯様な景況で漸次に進歩発展したが、纏まつた金を投じて纏まつた書籍を外国へ注文する様になつたのは、新圖書館の出来る三四年前よりの事で、リース教授の文庫を買受けたのも、目録を「カード」仕様にしたのも皆最近の事でありまして又年々著譯の諸家発書家及び版行者より寄贈をうけし冊数もすくなくはない其は年柄にもよりまして購入の数と匹敵する位でありまして殊に清客錢恂氏の如き、元斯明版以下の貴重なる典籍を寄せられしは殊に感謝すべきことでありました

最後に一つ言ひ添へて置くのは、新圖書館に移る前の閲覧の模様であるが、一日圖書の出入は多きも四五冊位少きときは二百冊位、閲覧人は四五十人乃至百人位に

閲覧室

過ぎねあつたので如何とも微々たる景況でありました、
而して其間に室長として従事せられし人々ハ山澤俊
夫　吉田東伍　小久江成一　高田俊雄　浮田和民の
諸氏でありました（以上市嶋氏談話）

白秀堂製

明治三十六年
二月下上浣起
筆
春城山人